

内藤コレクション 写本—いとも優雅なる中世の小宇宙

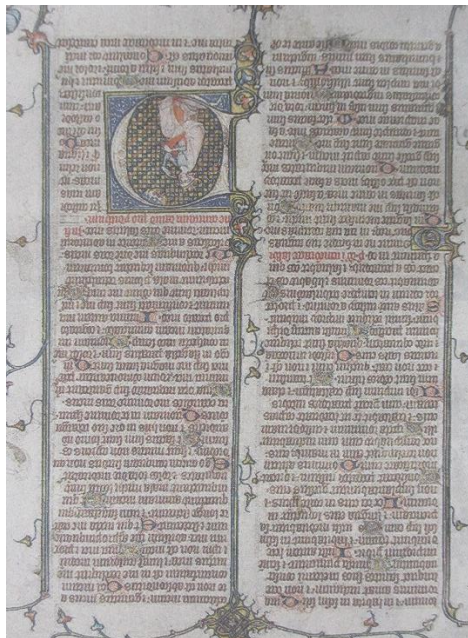
国立西洋美術館（上野公園） 24.06.11～08.25



印刷技術のなかった中世ヨーロッパでは、「写本」は人々の信仰を支え、知の伝達を担う重要な媒体であり、羊や子牛などの動物の皮を薄く加工して作った紙に人の手でテキストを筆写し、膨大な時間と労力をかけて制作された作品は、ときに非常な贅沢な品物となった。なかには、華やかな彩飾が施されて、一級の美術品へと昇華した作品もしばしば見られるとされている。

本展は、「内藤裕史」氏（筑波大学名誉教授）から寄贈された「写本零葉（れいよう）」（本から切り離された一枚一枚の紙葉）を中心とするコレクションと、国内の大学図書館の所蔵品を加えた「約 150 点」で構成されている。

聖書や詩編集、時祷（じとう）書、聖歌集など中世に広く普及した「写本」の役割や装飾の特徴を観察することができ、書物の機能と結びつきや文字と絵が一体となった彩師芸術の美「中世の小宇宙」を堪能することができる。



聖王ルイ伝の画家（マイエ？）彩飾 《セント・オールバンズ聖書 零葉》
リュソンの画家彩飾 《時祷書零葉》 彩色、インク、金 獣皮紙
東京新聞（朝刊）（24.07.20）に、本展の詳しい解説が記載されている。